



青少年作文・家族への手紙・「家庭の日」作文コンクール入賞者

問生涯学習課（☎62-1036）

◆青少年作文コンクール

心に残った出来事や私を変えた一言など、自由なテーマで作文を募集したところ、375人から応募があり、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

最優秀賞「人と動物の共生に向け」 小泉拓澄（朝日中3年）

優 秀 賞「メダカと未来」川尻晟士（かりがね小5年）、「一年生が教えてくれたこと」川越未来（朝日小6年）、「二人にあこがれて」浦野佑奈（雁が音中1年）、「メンタルヘルスの大切さ」伊藤奏多（朝日中1年）、「あこがれの人を目指して」伴妃奈乃（朝日中1年）、「偏見ではなく、理解を持つ」安藤千桜（雁が音中3年）、「よくがんばったで賞」江坂日向（依佐美中3年）、「ひとりじゃない」と感じられる社会へ」斎藤航平（榎ジェイテクト高等学園）、「みんながってみんないい」櫻井玖樹（榎ジェイテクト高等学園）、「自分との違い」三浦紘基（榎ジェイテクト高等学園）

最優秀賞「人と動物の共生に向け」朝日中3年 小泉拓澄

私たちは人の尺度で物事の価値観を計る。これは他の生物に対しても同じだ。医療などの発達により、人は命を大切にという価値観を持っている。しかし、本来、生物にとっての命とは繋げるものであり失うものだ。ただそれらを理解せず、動物同士の争いを見かけると、力を用いて阻止させる人が多くみられる。このような人の価値観を他の生物に押し付けるのは他の生物にとって幸せと言えるだろうか。こう考えるきっかけを与えてくれたのはある一つの出来事だった。

昨年十二月下旬。雪がちらつく寒日に、僕は家族と兵庫県に出かけていた。ホテルのチェックインまで少し時間があつたので、近くの小さな動物園に行くことにした。僕は昔から動物が大好きで気分が高揚していた。着いた場所は動物園と言えるか分からない程小さく、僕たちの家族以外だれもないひっそりとした場所だった。そこには狭い檻の中に閉じ込められている動物たちの姿があった。動物たちはほとんどが寝ていて、皆丸々と肥えていた。その光景を見て母親が

「餌もしっかり与えられているし、命を狙う敵もないし幸せそうだね。」

と言った。僕は親のその発言を聞いたとき、言葉にできない違和感を覚えた。たしかに人間の価値観からすると、動物たちは幸せそうに見えるかもしれない。ただ、動物の価値観から考えると、野生の争い合うという本能を遮られ、食事や行動範囲も制限されているこの状態は幸せと言えるだろうか。ただ死を待つだけの生活を動物たちは本当に求めているのだろうか。変わり映えない日々を送る動物たちに対してどうしてあげることもできない自分がとても情けなかった。

この日から僕は、様々な本や論文を読み、「人と動物の共生」について考えるようになった。そこには変わりゆく自然環境に適応しながら生きていく動物たちの姿、動物園の実態、ペットへの虐待、人による自然環境の変化など自分のまだ知らなかった世界が広がっていた。

前述のように、私たちは人の尺度で物事の価値観を計る。時に自分の価値観で善悪を判断し己の欲求を満たすために行動する。ただ、他の生物にだって感情はある。それらを考えず、人間の都合で動物から幸せを奪うのはあまりにも利己的すぎではないだろうか。

人間の爆発的経済成長に基づき、人工知能による情報社会化、自然環境の破壊、気候変動など深刻な問題が発生している。これは今までの地球の歴史を見ても異常な事態である。動物と人間が共生するためには、現在の環境問題をいかに自分事と捉え、行動するかが大切だと思う。僕も、少しでも社会の力になれるよう、地域のリサイクル活動や植林体験など、今の自然環境を守るために様々なことに挑戦していこうと思う。動物たちの何気ない日常が幸せで彩られるために。

◆家族への手紙コンクール

日頃、面と向かうとなかなかうまく伝えられない思いや感謝の気持ちなどがつづられた手紙が256通寄せられ、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

最優秀賞「父になった貴方へ」鶴身朋美

優 秀 賞「おしごとをおやすみしてくれたパパへ」須永咲花（富士松南小1年）、「ちゃれんじ」山口栞央（小垣江東小1年）、「じいじ早く帰ってきて」近藤朔矢（小垣江東小2年）、「お父さんへ」堀田航成（住吉小3年）、「車いすのおじいちゃん」又吉壱（富士松南小6年）、「おばあちゃん大好き」樋口慧匠（富士松南小6年）、「職人」今西史弥（榎ジェイテクト高等学園）、「支えてくれた父へ」岡本頼弥（榎ジェイテクト高等学園）、「そばにいる気がして」岡村優花、「ママ十年目のあなたへ」長尾嘉子

最優秀賞「父になった貴方へ」鶴身朋美

赤ちゃんが生まれるまでの十か月、ずっと一緒にいてくれてありがとう。十か月ってとても長く感じるけど、こうして今日を迎えると、あっという間の十か月だったね。

妊娠がわかった時、貴方が喜んでくれるかととても不安でした。でも貴方は、お腹の赤ちゃんに「お父さんだよ。早く会いたいよ。」って声をかけてくれて、私はそれがとても嬉しくて印象的でした。

妊娠中、心が折れそうな時もあったけど、貴方がいてくれたから乗り越えられました。貴方も今日まで、不安な時や大変な時が沢山あったと思うけど本当にお疲れ様でした。

夜遅くに私が食べられそうな物を買に行ってくれたこと、仕事終わりでも疲れた顔をせずに毎日家事をしてくれ

たこと、私の為に調べながら林檎を剥いてくれたこと、絵本を読む練習を沢山してくれたこと、深夜でも病院に連れて行ってくれたこと、私は一生忘れないし、生まれてきた子供にも「お父さんは貴方が生まれる時、こんなにも頑張ってくれていたんだよ。」と、ずっと伝え続けたい。

まだまだこれから、不安なことも沢山あるけど、貴方と一緒に何でも乗り越えていけると思う。これまでは私が支えられてばかりだったけど、これからは私が貴方と赤ちゃんを強く守っていきたいな。

心優しい貴方はきっと、この手紙も泣きながら読むのでしょうか。それでも私は、毎日貴方を笑顔にするよ。これからもずっと、貴方のことが大切で大好きです。

今まで支えてきてくれてありがとう。私を好きになってくれてありがとう。私を選んで結婚してくれてありがとう。私をお母さんにしてくれてありがとう。

生まれてきた赤ちゃんが、貴方に似た優しくて明るい女の子に育ちますように。

◆「家庭の日」作文コンクール

毎月第3日曜の「家庭の日」啓発のため、「家庭の日」作文コンクールを実施したところ、240人から応募があり、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。

最優秀「パパはふつう」山本枇采（富士松南小4年）、「ぼくの弟かいくん」小関湊介（住吉小5年）、「父からの貢献カード」大石湊（富士松南小6年）、「我が家の家庭の日」井上咲菜（朝日中1年）、「押しこめた僕の気持ち」加藤暖都（雁が音中2年）、「新しい命の誕生」スバシャネル（依佐美中3年）

優 秀「私の名前」坂口紗弓（富士松北小4年）、「家族そろってくらせる幸せ」門之園礼矢（双葉小5年）、「農家の子の手伝い」鈴木嘉仁（衣浦小6年）、「普通が、ちょっと特別な日」篠川咲空（雁が音中1年）、「家族ってあたたかい」石咲柚華（刈谷南中2年）、「弓道で出来た新しい家族の絆」森田みと（朝日中3年）

入 選 藤本笑舞・豊野莉唯（亀城小）、篠原立樹（小高原小）、石川怜央・古畑孝之助・中澤陸斗（日高小）、日下夕紀・芦高朱希（衣浦小）、村中孝弥・横田尚之（住吉小）、山崎楓蘭・片野心結莉・齋藤駿多（かりがね小）、水谷駿汰・酒井陽由・小畠芳佳（平成小）、土方崇介（富士松南小）、我妻月華・大野未結（富士松北小）、中川葉月（富士松東小）、杉浦綾音・鈴木愛依（双葉小）、田口栞幸・柴崎陽士・高橋咲貴（東刈谷小）、榊原寧音・湯ノ迫千春・加藤篤人（朝日小）、田宮詩唯・安藤数真（刈谷南中）、伊藤煌斗（刈谷東中）、都築快斗・石川佳歩・山本小鈴（富士松中）、加藤蒼稀（雁が音中）、松本怜・田中愛羽（依佐美中）、當房琉生（朝日中）

最優秀「新しい命の誕生」依佐美中3年 スバシャネル

私は、昨年の七月、夏休みが始まって一週間も経っていないある日、母から衝撃的な言葉を言われました。「赤ちゃんできた！」

その言葉を聞いて私は思わず、

「え、嘘でしょ。」

と言ってしまい、お母さんには、

「え、嫌なの。」

と聞かれてしまいました。私は何も答えられませんでした。正直、あまり心の底から喜ぶことができませんでした。

私の家庭は、お金がないわけではありませんが、特別裕福というわけでもありません。母から報告を受ける前に、偶然、「一人の子供を育てていくには、最低でも三千万円以上かかる」という動画を見たことがありました。そのため、私は喜びよりも不安という気持ちが多かったです。

報告を受けた日、母は体調を崩して家に帰ってきていました。母はそれでもうれしそうに、私にたくさん質問をしてきました。気にかけてくれていたのに、お姉ちゃんになるというプレッシャーをどうしたらいいかわからず、質問を無視していました。その様子から、母は、

「シャネル、怒っているの。」

と心配してくれました。にもかかわらず、私は、カッとなってしまい、

「私、来年受験生になるんだよ。その翌年に高校生になるのに、赤ちゃんができてどうやってお金払うの。」

と心ない言葉を言ってしまいました。

母も大変なのに、自分の気持ちばかりを押しつけてしまったことにすぐに後悔しました。母は少し悲しそうにしましたが、何も言いませんでした。

それから私は、夏休み中もずっと悩み続けていました。そんなある日、友達が声を掛けてくれました。私は聞いてもらうのも悪いとは思いましたが、話してみました。すると、

「お金のことは、お母さんたちがしっかりと管理していると思うから、安心して。お姉ちゃんであることのプレッシャーは、簡単に乗り越えられるものではないけれど、シャネルが今できることは、最大限の愛情を与えることだと思うよ。」という言葉掛けてくれました。それを聞いて私は、気持ちが軽くなりました。自分を追い詰めていたこと、完璧じゃなくてもいいことに気付きました。

この日を境に、両親ともコミュニケーションが増え、次第に自分らしく自然体で接することができていると感じました。時々考えてしまうこともありますが、親友に言われた言葉を思い出して自分らしくいたいと思います。

そして二月、小さな男の子の赤ちゃんが生まれました。生まれて三日後、母が退院してきました。

「抱っこしてみる？」

と言われ、びっくりしましたが、抱っこしてみると小さいけれど、かすかな温もりが伝わってきて、真冬だったけれど、心が一気に温まりました。そして、私の指をにぎり、かすかにほほえみました。その笑顔を見て、この笑顔は絶対守ると心に誓いました。